高すぎた代価



"Too Dearly Bought"

(1877)

からか、彼は小さな荷物を肩にかけて故郷の村を飛び出し、華の都・ロンドンのシティーロで ぎを当てて繕う仕事をしていた。彼の商売は靴直しである。 旗あげようとしたことがある。愚かにも当時は、うぶな彼の心にひらめいた意味での出 ずっと昔のことだが、 若気の至り

来る日も来る日も一日中、ティム・リドリーはキリとハンマーをせっせと動かしながら、

道が結局は見つからなかったにせよ、とにもかくにも三度の飯

酸いも甘いもかみ分けるよ

姿を見た者は、 ういうことなのか、まったく理解できていなかったのだ。これまで歩んだ六十年でで、彼の頭 うになった晩年には、それさえいただければ御の字と言える幸せ の経過とともにボコボコにされただけでなく、昔は頑丈な男だったのに、長年の悲しみという 霜が降り、 間違いなく、 額には深いシワが刻まれ、歩く足取りも心もとなくなってしまった。ティム 実際よりずっと老けていると思ったはずだ。というのも、 ――にさえ恵まれないのがど 彼は時

して亡くなった。彼は最愛の娘に幸せな未来を作ってやろうと昼夜を問わず働いたが、結局 ンドンに出たリドリーはすぐ恋に落ちて結婚した。それから十二年後に妻はひとり娘を残

「力が重くのしかかり、腰も曲ってしまっていたからである。

失望と悲哀に打ち砕かれただけだった。娘もまた同じように早まった結婚をしてしまったから である。それは父の意思に逆らった行動であったが、 彼は娘の望みがどんな些細なも のでも拒

高すぎた代価 届き者の亭主は次第に食いっぱぐれ、飲んだくれとなり、犯罪に手を染めたため、かつては明 む気になれなかった。 しかしながら、 その結婚の結末は彼が懸念していたとおりになった。不

ありふれた話

悲しいかな、

び心の中で陰鬱だった六年間を飛び越えて過去に舞い戻っていた彼には、そばに実の娘がいる 親よりも美人だと老人はよく思ったものだ。だが、娘と孫があまりにも似ていたので、たびた 前の体力も衰えてしまっていた。しかし、ルーシーの顔はそれはもう美しかった ため、精神的に早熟な子に育つ一方で、肉体的には運動不足のせいで虚弱な体質となり、持ち うもの、この子はいつもティム爺さんの唯一の話し相手で、始終うす暗い仕事場に座っていた 追いかけ、仕事の様子を楽しんでいるようだった。ルーシーは年の割には小柄で体も弱かっ 間この子はずっとそばに座っていた。時には奇妙な考えや空想に基づいて何やらペチャクチャ 永久に目を閉じたとき、明るい未来が訪れるはずの孫娘がその場にいるというのは、考えてみ ように思えた。 で、それがどういうことなのか分かっていなかったのだから。六年前に母親が死んでからとい と話すこともあったが、たいていは静かにじっと座ったまま、よく動く目で老人の手の ィムに残されたものと言えば、十二歳の孫娘だけであった。彼は毎日何時間も働いたが、その 長きにわたって未来を夢のあるものにしてくれていた数々の希望が瓦解してしまった今、テ それもそのはず当たり前だ。走り回った経験も他の子供たちと遊んだ経験もなかったの の間の繁栄を、そしてその死を見届けたことを思い出した。そして今度はまた、 ティムは自分自身の子供時代の日々を振り返り、 関係者以外には面白くも何ともない話 大人になってからは子供 動きを 自分が

―である。

い目をした快活な少女だった娘も、悲しみと恥辱に耐え切れず命を落としてしまったのだ。

高すぎた代価 仕事 分に対する好意が際限もないことにまったく気づいていなかったが、それでも相手の好意を何 やるようになった。こうして物質面で友人を助けてやったのである。ティムは、ページ氏の自 を構えると、 済する機会を求めてまでも、 気さくな感じの老紳士で、その慈悲深い顔立ちは善良な心の持ち主であることを雄弁に語って 並べられた古い靴に一瞬なりとも気を留める者は一人しかいなかった。それはページ氏という となく感じて、 に与えてあげるようになり、そうした仕事がなくなると、よそから仕事をわざわざ手に入れて てティムの業務状況を詳しく教えてもらった。その結果、ページ氏はちょっとした仕事を老人 いた。職業は建築家で、リドリーの仕事場と同じ建物の三階に事務所を構えていた。ページ氏 の前をいつも通って、それぞれの事務所へと向かう人々の中で、さながら商標のように店先に リド 行く手にチャンスが転がっていれば、単に慈悲を施して満足するだけでなく、 場は様々な会社の事務所が入った大きな建物の地下にあったのである。この仕事場の入口 老人の仕事場へ行くには街路から地下に通じる階段を降りなければならなかった。 すぐさま靴直し屋の仕事場に通じる石の階段を降りて行き、いろんな口実をつけ お爺ちゃんにとても優しくしてくれる老紳士に対しては、何のためらいもなく背 それなりにありがたく思っていた。 困った人を見つけようとする類まれな御仁であった。 一方、ルーシーの方は生まれつき内気な子 彼は事務所 わざわざ救

革の臭いでむっとする地下室にちょくちょく来ていた。

築家もまたこの子のことが大好きで、おませな美しい娘とわざわざ言葉を交わすために、

際に見に行きたいという不思議な気持ちにとらわれているようだった。 で、その記憶はとても曖昧になっていた。孫の方も想像の世界で美化していた田舎の景色を実 に話して聞かせてやった。実際、彼自身が最後に田舎を見たのはずいぶん昔のことだったの とができると考えたからである。彼はしばしば田舎についてできるだけ上手に説明しながら孫 にもよく分かっていたように、ルーシーがやせ衰えて行くだけの、この大都会から連れ出すこ ティムは孫の姿を見るたびに溜息をついていた。富を欲したことがあるとすれば、それは彼

陽がキラキラ輝いて、きれいな花がたくさん咲いて黄色になってる牧場のこととかよ。もう一 回、あたいに話してみて。田舎のこととか、丘や川のこととか、お牛さんが草を食べたり、太 「お爺ちゃん」と、ルーシーは老人の顔を見上げながら、よく言ったものである。「もう一

がら、「お爺ちゃん、いつかそこに行けるわよね?」と言った。 かせた。熱心に耳を傾けていた孫は大喜びで青い目を輝かせ、話が終わると深い溜息をつきな すると、ティムは頬に流れる涙を拭うために顔をそむけながら、できるだけ上手に話して聞 回、ぜーんぶ話してちょうだい!」

てられると、うんうんと首を縦に振るだけで、時おりポケットに手を入れ、そこに入っている 「そうさな、ルーシー、いつかな」とティムは答えたが、少女から「いつなの?」とせきた とにした。

きなかった。また、田舎に行っても孫の面倒をみてくれる知り合いなどいなかった。 じて補う程度のもので、それだけでは短期間であってもルーシーしか田舎へ行かせることはで しかしながら、結局は何も見つけることができなかった。祖父の稼ぎは家計上の出費をかろう をかなえようとする祖父の具体的な計画を何か見つけようとして、さらに彼の心を悩ました。 リドリー老人は孫の願いに心を痛め、何時間も悲しい思いをしていた。孫もまた、 その願い

数枚のコインを数えるくらいしかできなかった。

* * * *

は、すでにブーツの修繕は終わっていた。ちょうど正午頃だったので、上得意の客に対しては が置いて行ってくれた二足のブーツを修繕していた。たとえ頭を悩ませても、その結果は まで走って行くことにした。それで、ルーシーには「すぐ戻るからな」と伝えて、仕事場をあ できるだけ時間を守りたいと思っていた老人は、ブーツを持って階上にあるページ氏の事務所 きないなどということはなかった。実行不可能な計画に頭をめぐらすのを止めてしまった時に わらず無益なものだったが、だからと言って彼の手が止まってしまい、ちゃんとした仕事がで ある日のこと、リドリーはいつものように例の問題で頭を悩ませながら、前の日にページ氏

ゆる希望と願いと空しい計画が彼の頭をよぎった。 が悪いことに、陽光を浴びてキラキラ輝いている金貨の山に、彼の目がたまたま留まった。そ に待っている必要などなかったからだ。それでティムは中に入って周囲を見渡した。誰もいな の光景を前にして、一瞬、彼は体が硬直するのを感じた。頭がくらくらした瞬間、 い。彼はブーツを見えやすい所に置いて引き下がろうとした。ちょうどその時のことだ ツを置いて行くことにした。なぜなら、この建築家の場合は、確実に支払いをしてもらうため 建築家の事務所の前まで来ると、ティムは扉が少し開いているに気づいた。ノックをした 返事がない。 彼はブーツを持って帰りたくなかったので、事務所に入って見える所にブー 同時に彼の心を襲ったのは、ついに最大の ありとあら 渖

いをかなえる機会が訪れたという思いであった。

ない。やっと彼は本能的に周囲を見渡した。近くには誰もいない。さっと一歩前進し、次の瞬 あとで考えてみると、長い時間のようにも思えたが、 な感情にとらわれてしまった。どの位のあいだ身動きせずに立ちつくしていたか分からない。 ような質問を耳にした。 し、喉がからからになるのを感じた。理性的に考えることなどできず、矢継ぎ早に生じる強烈 「お爺ちゃん、いつになったらそこに行けるの?」と何度も繰り返される、胸を引き裂かれる リドリーは訴えかけるような眼差しで自分の顔を見上げるルーシーの青ざめた顔を目にし、 すると、突如として悪寒が体中に走り、次の瞬間には頭がくらくら 実際にはせいぜい一分ほどだったに違い

には両手でお金をつかんでいた。

い。彼は発覚するかどうかを運に任せようと思った。

返して「失礼いたしやす」とつぶやきながら急いで階段を降りて行った。 えんで」と答え、それからブーツについて言うつもりだったことを繰り返して言い、きびすを かし、この時にはティムも自制心をかなり取り戻していたので、「今日はずっと体調がよくね おうとしたのだが、舌がその役目を果たしてくれず、自分でも何を言っているのか分からなか びた口で懸命に返事をしようとした。「事務所にブーツを置いてきたところです」と必死に言 笑みでリドリーを迎えてくれ、「事務所に来たのかい?」と尋ねてくれた。靴直し屋は干から ちょうどそのとき別の部屋の扉が開いてページ氏が出てきた。ページ氏はいつもの温厚そうな った。ページ氏も相手の奇妙な態度に気づいてしまい、「気分が悪いのかね?」と尋ねた。 老人は激しい興奮で震えながら部屋から立ち去った。廊下に出て足早に去ろうとしていた、

た。これで、ともかく、窃盗の告発を受けるようなことがあっても、大胆不敵に否定すればよ て一枚の紙に包むと、その包みを古いブーツの中へ慎重に入れ、それを部屋の暗い隅に置い ると、ソブリン金貨のが十枚あった。喜びのあまり心臓の鼓動が聞こえるほどだ。お金をすべ なったことにすぐ気づき、盗まれたと間違いなく思うはずだ。ルーシーは座って物思いにふけ っており、祖父の存在に気づいていない。仕事場の一番奥の隅へ行って熱心にお金を数えてみ 仕事場に戻ったリドリーにとって最初の心配事はお金の処理であった。建築家はお金がなく

リドリー老人は作業台へ戻り、この上ないほど心を動揺させながら仕事をした。突然、聴覚 59

だけで、彼は気が狂ったように仕事を続けた。しかしながら、午後になっても誰一人やって来 が動物並みに研ぎ澄まされたような気がし、外の歩道を往き来する人の足音がことごとく、自 分を逮捕するために近づいてくる人の足音のように聞こえた。孫に話しかけられても聞き流

ない。いつしか地下室も暗くなり、店を閉めて帰り支度をする時刻になったが、まだ通りに出

ら、ルーシーに仕事場から出る準備をするように命じた。すぐに少女が片付けをすませたの 帰宅したに違いない。そう思った彼はやっと腰を上げ、震えながら宝物の安全を確認してか る勇気が出なかった。とうとう外もほとんど真っ暗になった。建築家はとっくに事務所を出て

暗闇の中、二人は手に手をとって家路を急いだ。

* * *

*

う」と言った。 次の朝、ティムは孫娘と朝食をとりながら、「ルーシーや、今日は仕事場に行くのはやめよ

「そうじゃよ。休みをとろうじゃないか」 「やめるの?」いぶかるような眼差しでルーシーは祖父を見上げた。

「じゃあ、 何するの、お爺ちゃん? 今日は日曜じゃないよ。礼拝に行かなくてもいいし、

どこ行くの?」

は体を震わせた。 ら尋ねた。 .田舎に行ってはどうかな?」と、ティムは孫を引き寄せ、金髪の巻き毛に片手を置きなが 「驚いて何も言えず、ただ自分をじっと見つめる孫の大きな青い目にたじろいで、

けば、 「本気じゃとも、ルーシー。さっそく行くとしよう。すぐ荷物をまとめて、それから駅 「でも、行けるの、お爺ちゃん? ホントに本気?」 一時間もせんうちに田舎に着いてるさ」

リーは大きい方の包みを、孫は小さい方を抱えて、粗末な下宿を出て行った。 ち受けるもの以外は眼中になく、想像をめぐらして楽しむことで忙しかったので、どのくらい ほどに、自制心を取り戻すにはかなりの時間がかかった。リドリーは仕事場のこと、そこに残 女の目には涙があふれ、ティムが田舎へ持って行かなければならぬ荷物を包む手伝いができる して行く商売道具や品物のことを考えたが、取りに戻る勇気はなかった。孫の方は、前途に待 ロンドンを離れることになるのかといった質問もしなかった。一時間後には準備が整い、 ルーシーは両手をたたき、老人の首に両腕を巻きつけて何度もキスをした。喜びのあまり彼

ちょっと尋ねただけで探していた目的の駅はすぐに分かった。リドリーは生まれ故郷の村へ

た。というのも、初めてロンドンに出てきた時の記憶があいまいだったので、その時に旅した 行くことに決めていたのだが、そこまでの旅費がはたして自分に出せるかどうか少し心配だっ

距離がとても遠く感じられたからである。しかしながら彼は安心した。実際は村まで五十キロ

ような、きれいな、立派な家々だった。 わって長い列をなす一軒家⑷がたくさん見え始めた。それはルーシーが今まで見たこともない かかっていた。線路の両側の視界をさえぎっていた大きな建物群も徐々になくなり、それに代 彼女はまるで新奇なものに心を圧倒されて疲れてはてたかのように、両目を閉じて座席に寄り 往来の中を目のくらむ速度で抜けて行った。ルーシーはほとんど一言も発さなかった。ただ座 て、大人の自分と半額の子供の分を足しても、大したことはなかった。 まもなく二人は汽車の座席に着き、大都会の玄関口をふさいでいる人間や馬車の混沌とした 驚いたように客車の窓の外をじっと見つめている。時々リドリーが目をやると、

憂慮の色が浮かんだ早熟な表情、大人びた態度がしばらく消えてしまったかのようだった。 が今まで一度も見たことがないような子供らしさが感じられた。彼女の普段の特徴とも言える 恐怖におののくかのように両手でサッと顔を隠したが、列車が通り過ぎてしまうと、また両手 祖父の手をつかむと、熱心に話や質問を始めた。時たま対向列車がピューッとやって来ると、 んだ。だが、彼自身はずっと黙り込んでいた-のように孫から子供特有の元気さが思わずほとばしり出るのを見て、リドリー老人はとても喜 を上げて老人の顔を見つめ、キャッキャッと笑ったものだった。その時のルーシーにはティム 幼い娘は感きわまったような興奮から少しずつ回復しているように見え、か細い小さな指で ――孫の質問に答えるために口を開く時を除いて。

も離れていなかったし、このたび手に入れたお金の額を考えると、三等車の切符の値段なん

がいろいろとあったのである。 リドリーの犯罪行為には、その本質を照らして見ると分かるように、卑劣さを軽減される側面 孫のために達成すべき目的の素晴らしさを強く感じた瞬間だけ、達成する際の手段の本質が見 たとしても 男だったのだ。そのため、しっかりと根付いた善の観念と激しく衝突して悪の誘惑になびいて ことに、もっとも彼を悩ましたものは罪が発覚する恐怖ではなく、あれは卑劣な忘恩行為だっ えなくなっていたのだ。 自身のためだけであれば、窃盗を犯すなんて――その機会と手に入る金額がどんなに大きかっ 信念もあってか、ずっと几帳面な正直者で通っていた。生まれつき立派な感情に駆られやすい たという強い意識であった。これまでリドリーは法律に対する畏敬の念のみならず、 を犯してしまった時には考えられなかったほど、今では事の重大さを自覚していた。不思議な きが加わっていた。 しまうということがどういうことなのか、彼はその事件の当日まで分かっていなかった。 その夜、リドリーは一度も目を閉じることなく、顔には日頃のやつれた表情に荒々しい目付 ――夢にも思わなかったであろう。本質的に善良な心の持ち主であったがゆえに、 彼は夜の静寂の中で昨日の行為を何度も思い起こしてみたが、 とはいえ、「悪人は一朝一夕にしてなるものではない」はと言われる。 あわてて罪 道徳上の

* * * *

宿屋の女将の名前を見てドキッとしたが、そのやつれた顔には次第に笑みが浮かんできた。 ビールと酒を店内で販売する権利が当該の女性にあることを示す言葉が記されている。老人は た。これはすぐに見つかった。宿屋の扉の上には大きな看板がかかっていて、そこには熊かそ 美しい流れを保っている。この市場町は彼が四十年前に知っていた頃に比べると相当に変化し の種の動物が明らかに意図されて描かれており、その下には「アン・ハート」という屋号と、 をあちこち歩いて疲れたし、好奇心の対象にもなりたくなかったので、宿屋を探すことに決め ていた。それで、彼の名前を記憶している人が見つかるまで時間がかかった。リドリーは通り らさほど離れていない。 このあたりの川はまだ大都会から遠く離れていたので、 汚れを知らぬ

「ここだ」とティムは言った。「ここに泊まろうじゃないか、ルーシー。この宿屋の女将さん お爺ちゃんの知り合いなんじゃよ」

今なお美しく、善良な女性であることを物語っていたが、宿屋の女将の場合には大目に見なけ た、ちょうどそのとき扉がサッと開き、 い、がっしりした体格で、年の頃はティムと同じくらいに見えた。その幾分か血色のよい顔は フで削った痕跡を留める低いベンチに腰かけて休んだ。孫が祖父に何かささやき始めようとし で、二人は嬉しそうに荷物の包みを質素なテーブルに置き、何世代もの人々が暇つぶしにナイ 孫は振り向くと、 祖父の手をとって一緒に中へ入った。宿屋の酒場には誰 宿屋の女将が大急ぎでやって来た。女将は元気のよ もいなかったの

とうとう二人の旅人は目的地に到着した。ティムの故郷は小さな市場町で、テムズ河の岸か

「おはようごぜえます、旦那さん!」と女将は大きな声で言った。「ご用件は?」

「あんたの名前はハートの女将さんじゃねえか?」とティムが答えた。

「へえ、さようですが」女将は少し驚いた様子だった。

ティムはほほえみながら、「昔はアン・ヘブドンという名前だったんじゃろ?」と尋ねた。

で? 話しぶりからして、このあたりの方じゃなさそうですが」 「旦那さん、さほど間違っちゃいませんよ、その点じゃ。けど、どうしてまたそれを御存知

「俺のこと、憶えてないかい?」とティムは言った。「ティム・リドリーって男と知り合いじ

やなかったかね?」 「あれまあ! ティム・リドリーかい? そういや、そうだね。まあ、そんなこと誰に分か

顔を見ても分からんかったよ、ホントに! で、こっちのおチビさんは、あんたの子供かい?」 るっていうんだい? まあ、ティム、どういう風の吹き回しだね? たまげたねえ、あんたの

「孫だよ」とティムは答えた。

さあさあ、こんなとこいないで、特別室の方に来てちょうだい! まあ、ティム・リドリーか 「あれまあ、ぶったまげたねえ! そうか、そうか、あたしら、年をとっちまってるからね。

化がいろいろあったんじゃよ。かわいそうに、うちの亭主もずいぶん前に死んじまってね。こ い、誰が信じるかね? さあ、おチビさん、手をつなごうね。ああ、リドリーさん、大きな変

65

の町にや、 いで あんたの仲間は一人も残っちゃいねえよ。こりゃ、大変、大変だ! さあ、おいで

が女将の「白熊亭」に滯在すべく、すぐさま取決めがなされた。 友として再会し、それを喜んでいたことは間違いない。というわけで、当分の間はティムと孫 押し殺すのは簡単だった。ティムはロンドンに出て昔の恋人のことをすぐ忘れてしまい、彼女 たのである。そうした真理が理解できれば、ロマンティックな気持ちなど、どちらにとっても た。事実、夫婦の契りを結ぶ寸前まで行っていたのだが、当時は二人とも非常に貧しく、そう もまた立派な宿屋の主人と結婚したので自活する必要がなくなったのだ。今、二人が単なる旧 した状況では色々と物入りな現実生活の方が、結局は恋愛感情よりもはるかに重要だと分かっ それから女将はのべつ幕なしに話し続けた。実を言うと、彼女とティムは昔はいい仲であっ

所では滑らかな、ビロードのような芝草が流れの遅い川の水際までゆるやかに傾斜している。 ちこちに見える。 列をなす葉の茂った栗の木の下を通りながら、川辺に沿ってぶらぶらと歩いた。 ので、美しい自然に対して無我夢中になった。時は初秋の頃で、樹木は豪華絢爛な衣裳をまと い始めていた。夕陽の赤い光線が広大な牧草地を横切るように照らすなか、老人と幼子は長い るため、本物の緑 たらふく食事をとったあと、リドリーと孫は長期にわたって抱いていた願いをかなえ こちらの浅瀬で背の高いイグサが群生しているかと思えば、あちらの別の場 :の野原を見に散歩に出かけた。 ルーシーは今まで一度も見たことがなかった しだれ 柳もあ

この小 くちばしが山吹色のクロウタドリのがピューッと飛んで行った。それ以外に聞こえる音といえ ーモー鳴く声だけだった。ティムは周囲に広がる美しい風景を楽しもうとしたが、それは無理 っていた。 小川のさざ波、栗の木の枝をそよがせる夕暮れの涼しい微風、そして犬の遠吠えや牛がモ 川は深まる夕焼けの光を鏡のように反射させていたが、川岸の近くは緑樹の陰で暗くな 時々どこか近くの雑木林からピーピーと鳴くツグミの声が響いて来たかと思えば、

そのような夕暮れ時を、二人はテムズ河の両岸をぶらぶらしながら、何度も過ごした。しか 目は一度ならず涙でキラリと光った。

は思いがけないものだったので、彼女は恍惚状態になっていた。時たま彼女から深い溜息がも それは祖父とは違う理由からである。広々とした空、大きな牧草地、まばゆいばかりの夕焼け な話だった。心おだやかではいられなかったのだから。ルーシーも同様に黙り込んでいたが、

目瞭然だったので、孫娘のために収入源を得たいと思ったのである。都会から田舎へ移ったこ はもう一度かつての商売を始めようと真剣に考えた。ルーシーの体調が全然よくないことは一 し、一ヶ月が経過し、すでに二人はわずかな金の蓄えもあらかた使い果たしていた。リドリー

彼女は取り戻した健康をすぐまた失い始め、体が目に見えて弱りだした。善良なハートの女将 とで最初は子供の健康にとても効果があったように思えたが、それは初めの二週間のことで、 「好転する見込みがあるじゃないか」と言って、老人を励ました。「あれは興奮しすぎ

たあとの反動で、おチビさんの体もすぐ回復するに決まってる」と言われたティムは、首を横

に振りながら、ため息を悲しげにつくだけだった。

に寝そべったり、川辺で身をかがめると、ふわふわした雲が滑らかな澄んだ川の底を船のよう なるかしら?」と彼女はティムに尋ねた。また川の土手をぶらぶら歩いたり、お花を摘 た。冬が到来し、霜と雪が周囲の風景をおおい隠した。「このあたりはまた去年のように緑に は楽しいから、とっても幸せよ」と言っていた。三ヶ月が過ぎると、もう外出できなくなっ 優しい心と器用な手で孫のためにできることなら何でもした――が、それでも彼女は元気がな とにでもなれば、残りの人生なんて何の価値があるだろうか? に進んで行くのを見れるかしら? り、ピーチクパーチク鳴くツグミやクロウタドリの声が聞けるかしら? くなってしまった。小さな体は日に日に衰弱している。彼女は質問に答える時はいつも「田舎 し屋になった。ちょっとした贅沢な品が孫のために手に入るなら彼はどんなことでもしたし、 て来たこと、耐え忍んできたことに対して期待しうる唯一の償いなのだが――奪い去られるこ をくじかれる感じがした。もし唯一の希望であるルーシーが――この子の幸せは、 今の彼には昔の面影が全然なかった。犯した罪を秘密のままにしておくことで、 彼は田舎家を借りて再び靴直 また滑らかな草の上 今までやっ 日毎に精神

で木々の蕾や春の花々が息吹いた。そのあとはぽかぽか陽気の長い一日となり、川の土手には に過ぎ去り、それから空は穏やかになった。また今年も野原は緑になり始め、三月と四月

クリスマスがやって来て、そして行ってしまった。

新年の最初の二ヶ月も荒れ狂う嵐

68

れなかった。というのは、ルーシーの小さな手は冷たくなり、声は永久に沈黙し、その墓に射 える幾千もの美しいものに対して発せられる、いかにも子供らしい、かわいい喜びの声 黄金色の花が咲き乱れた。しかし、悲しいかな、ちっちゃな手が花をつかんだり摘 喜びのあまり打ち震えることはもうなかった。 初めての経験ということで実に神々 h だりし も聞か

* * * *

す太陽の光は黄金色の花に吸収されてしまっていたからである。

対する当然の報いとして、孫を失ってしまったのだと考えずにいられなかった。それで、体が 悩まされた。 無為な時間を長く強いられていると、ティムは肉体的な苦しみよりも良心の呵責の方にずっと た。何もやる気がしないのだということに幼なじみのアン・ハートは気づいていた。こうして で誓ったものである 回復したならば、悪徳の償いをするためにできるだけのことをしようと、彼はしばしば心の中 老人は孫娘の死に大変なショックを受けた。重病になって長い床に就き、何もできなくなっ 彼はごく普通の精神の持ち主だったので、ずっと気がとがめていた自分の犯罪に

回復し、 ティムは生まれながら強靭な体質だったので、アン・ハートの手厚い看病もあって最後には 日々の仕事を再開できるぐらいになった。とはいえ、精神的に受けた打撃からも明ら

ずかに残っていたが、

それも今では完全になくなってしまった。

を示していた。彼の生来の陽気さと機嫌のよさは、苦労と悲しみに満ちた長い人生の中でもわ るで常に心配事があるかのように視線が右に左に移る、その落ち着かない目は不安な心の状態 年が経 過 した。 年前も彼の顔はやつれて青白かったが、今はその時以上にひどくなり、

かに彼の死期は早まりそうに見えた。ルーシーと一緒にロンドンを抜け出してから、

深くなり、正直な村人たちから単刀直入に質問されるのを何よりも恐れていたからである。 とはできなかった。なぜなら、心に重くのしかかっていた秘密のために、 てくれた。しかし、 いた。この疲れはてた老人に深く同情していた善良な人たちは、いつも喜んで仕事を持ってき 彼は隣人たちと会うことも話をすることもできるだけ避け、朝から晩までひっきりなしに働 たとえ彼がそうしたくても、隠し事などしないで彼らと自由に付き合うこ 彼は常に不安で疑い

クでがたくさん咲いている。 たからである。 そこは粗末な墓石とともに孫娘が安らかに眠る場所である。 ていた。老人は芝におおわれた土饅頭の上に身をかがめ、絶望と悲嘆のあまり涙にむせんだ。 村人たちが動きだす前に早起きして教会墓地まで行き、ルーシーの墓のそばに一時間ほど座っ 彼が田舎家から外へ出ることはめったになかった。ただし、日曜日だけは例外で、その ここに咲いているヒナギクを見るのがルーシーの楽しみだったことを思い出し 日曜はいつも、彼は早朝の太陽の光を浴びながら、この場所に座っていた ティムはヒナギクを見て嬉しかった。ここは二人が お墓の周囲の芝草の間にはヒナギ . . 緒 に 散 日は

ちょうど

浸し、最後の花びらが落ちるまで大切に面倒をみてやった。 るまで。 教会の最初の鐘が鳴って、みんながすぐにやって来るから、これ以上ぐずぐずできないと分か その時間になると彼は立ち上がり、ひと握りのヒナギクを摘み、家に持ち帰って水に

きな満足であった。 に生じたものである。 小銭の山を満足そうに眺めた。ティムの場合、その満足はもともと気高い感情があったがゆえ となった。毎晩、仕事を終えると――ローソクに火をつけることさえしなかったので、それは いつも日没時であったが して金を貯めた。その甲斐あってか、今では八ポンドが貯まり、あと必要なのは二ポンドだけ 五年間、ティムは靴直しの仕事に精を出し、生活必需品でさえ買い惜しみ、できるだけ節約 それは普通の守銭奴がもっと多くの金額を目にしても感じないほどの大 ――彼は宝物をしまっている引出しの所へ行き、それを取り出しては

突然死したとしても、 不安である。そのことを考えると恐ろしくてたまらず、彼はしばしば真剣に考えた んだ。秘密をすべて彼女に明らかにすることは絶対に無理だったからである。 彼女の疑いを招くのではないかと思い、自分の遺言執行人になってくれと頼むのに二の足を踏 くべきではないかと。 い、苦労してきたにもかかわらず償いをすることができなくなってしまうのではないかという 彼の心にはいつも一つだけ恐怖が宿っていた。それは自分の死によって計画が頓挫してしま 計画ができるだけ実行されるように、このことを誰か友だちに伝えてお 信頼が置ける唯一の人物は「白熊亭」の女将だけだが、 伝えたりすると -自分が

お宝がちゃんと目的地に届くように取り計らうことを約束してもらおうと思った。運がいいこ ったと感じ、ハートの女将に宝物の話をして、目標を達成する前に死ぬようなことがあれば、 ているのを感じていた。ある日の午後のこと、作業していた彼は実際に死の危険が目の前に泊 身を粉にして働いた年月も今では六年目となっていたが、ティムは日に日に体力がなくなっ

とに、ちょうど決意を固めたとき、仕事場の戸口が人影で暗くなり、彼が考えていた人物がや って来た。 「こんにちは、リドリーさん」と、その陽気な人物が声をかけてきた。「近頃はあんまり村人

ティムはわずかに顔をほころばせ、古靴の底をハンマーでたたき続けた。

たちに顔を見せてくれないね」

「時間がないって! まあ、悲しいねえ、どうしてお前さんみたいに働く必要があるんだい? 「そうさな」彼の弱々しい声は震えていた。「外出する時間があんまりないんでね」

身代でも築くつもりかね、ティム?」

さん、ちょいと座ってくれないか?
少し話したいことがあるんだ」 ティムはしばらく黙っていたが、やがて女将の顔を見上げて真剣に答えた。「ハートの女将

に 「何でも言っとくれ、ティム!」お前さんが口を開いてくれて、あたしは嬉しいよ、

ティムは腰を上げ、お金をしまっている引出しの方へ行った。それから全部を取り出して、

72

びっくり仰天した女将の目の前のテーブルに置いてみせた。

わんかったよ、ティム」 「これだけ持ってながら、あんな生活をしてたんかね! まさか、 お前さんが守銭奴とは思

んじゃねえんだ。これは別の人のもんでな。お願いを聞いてやるって約束してくれるかね?」 「聞いとくれ、アン」と、リドリーは片手で金をおおいながら言った。「自分のために貯めた

「ああ、もちろんするさ」と女将は答えた。「できるだけのことはするよ」

「簡単なことさ。俺はロンドンの紳士に十ポンドの借りがある。これは俺の稼ぎから貯めた

なことになったら、しかるべき所に届くよう取り計らってくれんかね? これが住所だ」と言 って、彼は紙切れを渡した。 八ポンドだ。で、十分な金になって、その紳士に送れるといいんだが、その前に俺が死ぬよう

アン・ハートは驚きのあまり声も出なかった。

い? すぐ仕事をやめて特別室に来ておくれ。そうすりゃ、お前さん、今日のうちに残りの二 「もっと前にどうして話してくれなかったのさ。何でも話せる友だちって思わんかったんか

ポンドをあげるからさ。たとえ素寒貧になっても、あたしが何とかしてやるよ」

驚きの声をあげながら立ち去ろうとした。 う女将が根負けし、 ティムは首を横に振った。アンは譲らなかったが、老人もひるむことなく固辞した。 秘密はちゃんと守るからね、願いもかなえてやるからねと約束し、 なおも

とうと

長生きするよ。 まあ、 あたしを見てごらん。お前さんと同い年だけど、あたしが死にそうだなんて、 心配しなさんな、ティム」と女将は去り際に言った。「お前さんはまだ何年も

そんなことは思うまい」

事場の入口が見えた。そこはまだ靴直し屋として使われていたが、扉の上には知らない名前が ねることに何の怖れも感じなかったが、あんな卑しい忘恩行為を働いたのに、相手の前 か? この建築家が親切であることは身に染みるほど分かっていたので、我が身を彼の手に委 対そうしておくれと言ってきかない女将から旅費を借り、彼はロンドンに向けて出発した。 なるなんて信じられなかったので、彼は何度も何度も数え直した。そして、お金を「白熊亭」 み上げた一ペニーの銅貨、六ペンスの白銅貨、一シリングの銀貨®の合計がそれだけの金額に うという気になった。一年ちょっと経つと目標も達成でき、十ポンドが貯まった。 て罪を犯したことを今から白状するのかと思うと、彼の決心は何度もぐらついた。 ージ氏はまだ昔の事務所にいるだろうか? いるとしても、自分を受け入れてくれるだろう のは言うまでもなく、見た目も申し分なかった。そして、一日たりとも待てなかったので、 の女将の所へ持って行き、本物の金貨と交換してもらった。金貨十枚の方が持ち運びしやすい 彼は正午頃に華の都に着き、喜びと不安に打ち震えながら、速足で目的地へと向かった。ペ それからというもの、リドリーの心は軽くなり、もうしばらくは元気を出して頑張ってみよ 絶対に白状しようと決意を固めた。建築家の事務所が入っている建物まで来ると、昔の仕 目 しかしなが あ 前 に立っ 院に積

情になった。

戻すべく、彼はしばらく廊下の壁に寄りかかってから、扉をノックした。「お入りください!」 がまだあったので、彼の口からは「ああ、ありがたい!」という声が出た。体力と決意を取り るのにずいぶんと時間がかかった。やっと建築家の事務所に着き、窓ガラスにページ氏の名前 書かれていた。心苦しくなって息もほとんどできなくなり、弱々しい震える足取りで階段を上 という元気のよい大きな声が聞こえたが、それはまさしく建築家自身の声であった。

だけだったが、リドリーのことは少しも記憶にないように見えた。二人とも数分のあいだ黙っ ていたが、建築家の方は物問いたげな表情でじっとリドリーを見ていた。 方はほとんど変わっていなかった。変わった所があれば、それは少しだけ白くなった髪とヒゲ を彼がかつて見た例の机から――顔を上げたが、その顔には驚きの表情が浮かんでいた。彼の ティムは中に入り、もよりの椅子に倒れ込んだ。ページ氏は机から ―お金が置いてあるの

わがれていたため、意のままに話すことができなかった。建築家は首を横に振った。 「ページさん、俺のこと、分かりますか?」と、ついにリドリーが口を開 がいた。

みを働いて、恩を仇で返しちまった奴ですよ」 俺はリドリー、かつて下の階で働いとった、とても親切にしてもらった靴直し屋です。

ジ氏は驚いた様子で突っ立っていたが、次第に落ち着きを取り戻し、あわれみ深い、優しい表 リドリーは自分の息がとだえてしまうことを怖れているかのように早口でしゃべった。ペー

赦すって言ってくだせえ!」

「はい、受け取ってくだせえ! 受け取って! それでもって、お願いですから、 「でも、俺は返しに来たんです」とティムは言って、待ちかねたように金を机の上に置いた。 俺のことを

知っていたよ」と彼は低い声で答えた。

罪の償いはもう十分にしたじゃないか。この金をまた受け取って、お孫さんのために使いなさ 「ずいぶん前から赦していたよ、リドリーさん。出来心だということは分かっていたからね。

らないでくだせえ!」 け取ってくだせえ。まだ泥棒だと思ったままで死なせたいんですか? 俺を絶望の淵に追いや 「ああ、悲しいことに、あの子は亡くなりました! 死んだんですよ! この金をどうか受

だ。老人の顔色と興奮に衝撃を受けたページ氏も立ち上がって追いかけた。 から落ちた音で、建築家が行った時には、すでに老人は死んでいた。 部屋の扉まで行ったところで、すさまじい音が階段から聞こえてきた。それはリドリーが階段 そう言うと急に立ち上がり、ティムはよろけながら部屋から出て行き、階段の方へと急い しかし、ちょうど

- (1)によって巨万の富を得て、のちに三度ロンドン市長になった。 紀頃からある「ディック・ホイッティントン (Dick Whittington)」の話が有名。彼は奉公が辛くて マイルの地域。若い頃に一旗あげようとロンドンに出て大成功を収めた人物の伝承としては、十三世 い猫を連れて逃げ出したが、市内から響いてきたボウ教会の鐘につられて引き返し、その猫の活躍 ロンドン市長と市会が自治を行っている英国の金融・商業の中心地で、テムズ河北岸の約一平方
- に変化していた」とあることからも、六十年は作者の勘違い。 主人公と娘の早婚を考えると、また「この市場町は彼が四十年前に知っていた頃に比べると相当
- (3) 行により登場した新しい金貨のこと。 英国の一ポンド金貨。ヘンリー七世の時に初めて造られたが、ここでは一八一六年の金本位制施 都市部で成功した中産階級の人間は、工業化で労働者階級が増えた都市 (特にスラム街) を逃れ、
- 郊外に一軒家を持つようになった。 出典は古代ローマ時代の詩人ユウェナリス(Decimus Iunius Iuvenalis, anglicized as Juvenal,
- c. 55-c. 140) S 『諷刺詩』 (Satires) にある諺 (Nemo repente fuit turpissimus)°
- 有名な「六ペンスの唄」(Sing a Song of Sixpence) にも出ている。 大型ツグミの一種で、雄は全身と足が黒く、嘴と瞼が黄色、雌は全体が褐色。マザー・グースの

高すぎた代価

- 愛する人の上にヒナギクが生える(つまり死ぬ)という言い伝えがある。

- - (7)

シリング=一ポンド)。

ヘンリー七世の時代に鋳造されて一九四六年まで続いた銀貨(十二ペンス=一シリングで、二十

78

- - - ヒナギクは墓地によく生えている。春の最初に見たヒナギクを踏みつけないと、来年はその人か